

痰咳強して、療禱術盡たるに、柀、南天、葉紫蘇葉の陰干を當分に合せ煎じ、湯茶のごとく頻に用れば必驗あり、或は天瓜の實を多く煎じつめて、ねり薬のやうになりたるを頻に用るもよし、されど初一年は奇効あり、次の年はさまでにあらす、三年目にはいと効うすし、四年目に至ては更に能なし、へチマの水を煎じつめて用るも、亦右のごとく、自然に効薄くなりて詮なし、唯柀、南天、紫蘇の三種の葉の陰干の煎湯に及ものなし、

〔三代實錄清七〕貞觀五年正月二十七日庚寅、賑給京師飢病尤甚者、自去冬末、于是月、京城及畿内畿外、多患咳逆、死者甚衆矣、

〔三代實錄清十〕貞觀七年四月五日乙卯、是日、内裏并諸司、綱所、延名僧一人、受十善戒、讀般若心經、僧俗所讀經卷數、各別錄奉進、去年、天下患咳逆、病、今年、内外疫氣有萌、故轉經攘之、

〔三代實錄清十一〕貞觀十四年正月廿日辛卯、是日、京邑咳逆、病、發、死亡者衆、人間言、渤海客來、異土毒氣之令然焉、是日、大被於建禮門、以厭之、三月七日丁丑、太政大臣房良患咳逆、去二月十五日、出自禁中直廬、在私第、是日、資錢五十萬、以充祈禱之費、

〔今昔物語二十七〕或所膳部見善雄伴大納言靈語第十一

今昔、    ノ比天下ニ咳病盛リニ發テ、不病ヌ人无ク、上中下ノ人病臥タル比有ケリ、其レニ或ル所ニ膳部シケル男、家内ノ事共皆ナシ畢テケレバ、亥ノ時許ニ人皆靜マリテ後、家へ出ケルニ、門ニ赤キ表ノ衣ヲ著冠シタル人ノ極ク氣高ク怖シ氣ナル指合タリ、見ルニ人ノ體ノ氣高ケレバ、誰トハ不知子下モ、下臍ニハ非ザメリト思テ突居ルニ、此ノ人ノ云ク、汝デ我レヲバ知タリヤト、膳部不知奉ズト答フレバ、此ノ人亦云ク、我レハ此レ古へ此ノ國ニ有リシ、大納言伴ノ善雄ト云シ人也、伊豆ノ國ニ被配流テ早ク死ニキ、其レガ行疫流行神ト成テ有ル也、我レハ心ヨリ外ニ公ノ御爲ニ犯ヲ成シテ、重キ罪ヲ蒙レリキト云ヘドモ、公ニ仕ヘテ有シ間、我ガ國ノ恩多カリキ、此